ラジオ放送

＜令和3年7月～9月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.436

もくじ ～*contents*

＜金光教案内＞

☞ 作家・かんべむさしさんによる金光教の紹介

●かんべむさしの金光教案内Ⅲ　第１回　*page 1*

●かんべむさしの金光教案内Ⅲ　第２回　*page 5*

●かんべむさしの金光教案内Ⅲ　第３回　*page 9*

●かんべむさしの金光教案内Ⅲ　第４回　*page 13*

●かんべむさしの金光教案内Ⅲ　第５回　*page 17*

＜教師インタビュー＞

☞ 金光教の先生へのインタビュー番組

●何を見ても聞いてもイライラする　*page 21*

広島県・大竹教会　早羽総子

＜平和＞

☞ 戦争体験者のお話

●重い記憶　*page 26*

茨城県・水戸教会　岡本眞行

＜教師インタビュー＞

●被災地の教会から　*page 31*

大分県・大鶴教会　江田泉

＜私からのメッセージ＞

☞ 金光教の先生のおはなし

●スナックの祈願祭　*page 35*

東京都・麻布教会　松本信吉

＜あなたへの手紙＞

☞ 悩みや疑問にお答えします。

●第１回　理不尽な上司／環境問題　*page 39*

●第２回　近隣トラブル／息子にイライラ　*page 43*

●第３回　娘が受験で不合格／お葬式は必要か　*page 47*

●第４回　42歳の引きこもりの息子／ダウン症の赤ちゃんを妊娠　*page 51*

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内Ⅲ」第1回

おはようございます。かんべむさしと申します。職業は作家でございまして、日本文藝家協会と、日本ＳＦ作家クラブの会員になっております。また金光教には、40代の後半になってから、御縁を頂きました。人生の途中で、いわば「横から入った」人間でございますので、まだまだ初歩の信者です。

で、それはともかく、今朝から週1回で5週にわたって、金光教の教祖様、「様」と言うとどうもかたくなりますので、失礼して「さん」と言わせていただきますが、教祖さんと、その教えを受けた、当時の信者の方々のお話をさせていただくことになりました。

資料として使わせていただきますのは、金光教の教典と教祖さんの伝記ですが、私、本を読むのも仕事のうちで、趣味と勉強を兼ねて、いろんな本を読んできております。

ですから、金光教の教典も教祖さんの伝記も、熱心な信者が神聖な書物を拝読するという姿勢ではなく、まずは作家が、「どんなことが書いてあるのかな」という興味で読んだわけです。そしたらこの2冊ともが、無茶苦茶に面白かったんですね。

例えば、分厚い教典の大半が、いろんな信者さんたちのエピソード集になっておりまして、時は幕末から明治時代、所は教祖さんがおられ

た備中大谷、いまの岡山県浅口(あさくち)市金光町を中心とした山陽地方。その時代と環境の中での人々の暮らしぶりや、世の中の様子が実にリアルに分かるんですね。

そんなわけで、教典も伝記も私にとっては、「面白い本」「幕末時代の勉強になる本」でもありますので、その思いを土台にして、お話をさせていただきたいと思います。

そこで、まず教祖さんの紹介でございますが、教祖さんは元々は備中大谷で農業をしておられた方です。子どもの頃から神仏に参るのが好きで、温和で正直な人でしたが、なぜか不幸や不運にも度々見舞われてました。子どもを3人も亡くすとか、自分も大病をするとか、農家にとっては家族同然の牛が2頭も死ぬとかでして、それらの苦難をとおして信心を進めるうちに、神様とお話をさせてもらえるようになられたんですね。

そして人々の頼みに応じて、願いの成就や難儀の解決を神に祈念し、かなえてもらえるようになられた。神と人との仲立ちになって、人の願いや悩みを神に取り次ぎ、神の思いを人に取り次いで、その人に合った生き方を教えていく。それでこれを「取次(とりつぎ)」と申しまして、今でも金光教の根本になっている働きです。

で、教祖さんはその「取次」を、農業をしながら続けておられたんですが、神様から、「世間には難儀に苦しむ者が大勢いる。だから農業をやめて取次に専念して、助けてやってくれ」と頼まれました。そこでそれからは、明治16年

に亡くなられるまで大方25年間、自宅である農家のひと部屋に座り続けて、人助けの「取次」に励まれたんですね。

さあ。そこで、その教祖さんがどんな雰囲気の人だったのかですが、当時の女性信者さん2人が、こんな表現をしておられます。

「眉長く、肉付きよく、つやよく、温情あふるる方であったが、眼付きにすこぶる鋭い感じを受けた。人間として、こういう方がおられるかと思うた。見たことのないような人だと思うた」。もう一人は、「きついような、優しいような方でありました。これが本当の神様じゃなあと思われ、こういうようなお方は、どこにもあるまいと思うた」

私、教祖さんの伝記で初めてこの部分を読んだ時、作家として、本当に感心しました。難しい言葉は一つも使ってない。普通のおばさんが、普段の言葉で伝えてるわけですが、教祖さんの顔や体付きや雰囲気が実によく分かる。「なるほどなあ。こういう表現方法があるか」と、勉強になったんです。

もちろん教祖さんが、そんなふうに伝えてもらえる段階に達するまでには、厳しい信心修行の年月がありました。その結果、神様から最終的に、「天地金乃神（てんちかねのかみ）」という神名、神様ご自身の名前が伝えられ、教祖さんに「生神金光大神（いきがみこんこうだいじん）」という神号が与えられたのは、修行の階段を一段ずつ上がり終えてのことで、一足飛びではありません。だから「生神」という名称についても、「ここに神が生まれる」という意味であっ

て、誰でも努力して信心を進めればそうなれますよと、教えておられたんですね。

私の経験による実感ですが、金光教は間口が広くて親切で、他の宗教も否定しない、穏やかな宗教です。そして全国どこの教会でも、先ほど紹介いたしました「取次」を、毎日続けておられます。人の願いや悩みを神に取り次いで、成就や解決を祈念する。そして同時に、神の思いを人に取り次いで、その人に合った、より良い生き方を教えていく。教祖さん以来の伝統が、今も生きてるわけなんですね。

はい。というところで、時間がきました。来週はその「取次」の実例を紹介させていただきます。ありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内Ⅲ」第２回

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」。先週は、教祖さんの人物紹介と、その教祖さんが始められ、今でも全国各地の教会で毎日続けられております「取次」ということについて、お話をいたしました。

人の願いや悩みを神に取り次いで、その成就や解決を祈念する。そして同時に、神の思いを人に取り次いで、その人に合った、より良い生き方を教えていく。そこで今朝は、その取次の具体例を、金光教の教典から紹介させていただきます。かなり長い記録なので、ダイジェストさせていただきますが、明治６年のお話です。

荻原須喜（おぎはらすぎ）さんという若い女性が、「血の道」、今で言えば婦人病の一種ですが、それで２年間寝付いておりました。医者よ薬よ、さらには当時のことですから加持祈祷（かじきとう）よと、手を尽くしても治らず、夫も両親も困り果ててたんですね。そしたらある時、知り合いの人が、「まあ、一遍参ってみなさい。他の拝む人とは違って、神々しいもんじゃ」と、備中大谷の金光様、つまり教祖様を薦めてくれました。

そこでまず、須喜さんの父親が参って、「どうぞ娘の病気を治してください」とお願いしました。そして教祖さんが、「信心しなさい。信心さえすれば、おかげはあるから」と優しく教えてくださったので、以後そのとおりにしてた

つもりだったんですが、やっぱり治らない。それでもう一回父親が参ったら、教祖さんは今度は、「一遍でいいから、連れ添う亭主に参ってこさせなさい」と仰った。

で、ここからが教祖さんと須喜さんの夫との対話で、私が「なるほどなあ」「おもしろいなあ」と思った部分なんですが、

「お前の家ではどんな信心ができておるか」

「へい。日本国中、あらゆる神仏を信心いたします」「それはあまりの信心じゃ。その中でも、特にありがたいという所はないか。何もここへ信心せよと言うのではない。自分が本当にありがたいと思う神様に一心に信心すれば、おかげが受けられるのじゃ。お前の家の信心は一心になっていない」

そして、さらに言われたんですね。

「病気をしてる本人は、まことに執念深い者で、常に不足ばかり並べておるが、不足におかげはない。日夜、あれにもこれにも、不足ばかり言うておるじゃろう」

須喜さんには会ったこともないのに、次から次へとその具体例を挙げられて、

「それだから病気をしておるし、治りもしないのじゃ。帰ってそれを病人に伝えて、本人がなるほど私が悪かったと、腹の底から得心がいったら、一家相談の上、ここぞと思う神様に信心しなさい。必ず治るから」

その教えに感激も興奮もした夫が、宙を飛ぶようにして帰って、そのことを伝えたら、須喜さんも心にズキッときたんでしょうね。

「なるほど。私が悪かった。不足とわがままばかりのねじけ根性で、一寸刻みにされても仕方のない人間でした。改心をいたします」

夫も両親も泣いて喜んで、もちろん一心になるべき信心は、こんなありがたいことを教えてくださった、金光様の所にと決めました。そして夫が翌日それを報告に参ったら、

「今度はおかげが受けられるぞ。しかし、お前がここまで参るには、仕事を休まねばならず、弁当や小遣いの用意もいるから、家で拝んでおきなさい。3週間で治るから」

そう言ってもらえて、その結果、16日目に起きられるようになり、3週間目には元気な頃と変わらない体になったんですね。

そこで須喜さんは、夫に付き添ってもらって御礼に参ったんですが、もったいなくて言葉も出ず、畳に頭をすり付けて心の中で夢中で御礼を申し上げてましたら、教祖さんが「ありがたいかや」と仰った。「金光様。もう何も申し上げられません」と、須喜さんは泣くばかりでしたが、教祖さんはまことに優しい声で言ってくださいました。

「よくおかげを受けなさった。今のようなありがたい心に早くなっておれば、2年も難儀せんでもよかったのに。しかし、これまでのつらかったことと、今のありがたいこと、その2つさえ忘れなかったら、病気は二度と起きないからな。そしてこれからは、病気の人がいたら神様に頼んであげなさい。自分はもう治ったから、人のことは知らないというような心を出すと、

また病気になるぞ」

そこでその先、荻原須喜さんは病気や何やで難儀してる人のことを、神様に願ってあげるようになり、大勢の人を助けて感謝されたという、そういうお話です。

で、私が金光教の教典でこの記録を読んで感じましたのは、教祖さんの優しさ、穏やかさ、親切さ、それから「一心にさえなれるのなら、どこへ信心しても構わないのだ」という教えなど、金光教の寛容さがよく表れてる話だなあということでした。

全国各地の教会で、今もこんな具合に、人それぞれの問題に応じた、個別の「取次」が行われてるわけですが、その根本は、理屈ではなく、教祖さんの取次をお手本にした、こういう「心」の世界、「情」の世界です。

はい。それでは来週は、教祖さんの伝記から、「お供え」についてのお話を紹介させていただきます。ありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内Ⅲ」第３回

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」。先週は、長患いが治った女性の事例をとおして、教祖さんの親切で優しい取次ぶりや、一心に信じることの大切さなどを紹介いたしました。そこで今朝は、教祖さんの伝記から、ある男性信者が参拝した時のエピソードを紹介させていただきます。

時は幕末前後。所は教祖さんがおられた備中大谷ですが、そこから少し離れた村に、国枝三五郎（くにえださんごろう）という、農業をしてる人がおりました。目の病気を患って、教祖さんの所に参ってお願いし、良くなったのがきっかけで、信心を始めた人です。で、この国枝さんがある年の夏、畑ですいかが育ちましたので、その「初生（はつな）り」、最初の収穫を、まず自宅に祭ってある神様にお供えして、次の日、それを持って参拝に出掛けました。

それで、田畑が広がる中の田舎道を歩いて、途中で一服してましたら、そこへ巡礼の親子がやってきました。当時のことですから、親子共に白装束で菅笠（すげがさ）をかぶって、長い杖を持ってたんでしょうね。そしてその父親が、「どこへ行かれますか」と聞いてきたので、国枝さんは、「すいかの初生りを持って、大谷の金光様の所へ」と答えました。

そしたら、夏の暑い日で喉が渇いてたんでし

ょうし、おなかも空いてたのかもしれません。巡礼の子どもが、「わしも金光様になりたい」と言って、つまりそのすいかを欲しがって、泣き出したんですね。それで、国枝さんは優しい人だったんでしょう、かわいそうに思って、その子にすいかをやりました。

しかしそうなると、参拝は手ぶらでということになりましたので、大谷の金光様、つまり教祖さんの所に着いても、何となく入りづらくて、表でもじもじしてたんです。するとそこへ教祖さんが出てこられて、「国枝さん。すいかの初生りは、ゆうべ、神様が喜んでお受け取りになった」と仰った。だから気にせず、安心して中へ入りなさいということでしょうけど、既にちゃんと知っておられたんですね。

それで私、初めて教祖さんの伝記でこれを読んだ時、昔の夏の農村や田舎道の光景が目に浮かびまして、その暑さや静けさが分かり、せみの声なんかも聞こえてきそうに感じました。情景といい、話の内容といい、「これは以前テレビでやってたアニメ番組、『まんが日本昔ばなし』の世界だな。このままアニメにできるなあ」と思いました。元々そういう優しい穏やかな雰囲気は好きですので、一遍で覚えてしまったんです。

で、それはともかく、国枝さんは形としては手ぶらで参ったわけで、すいかそのものは巡礼の子どもが食べることになった。でも教祖さんは、「ゆうべ、神様が喜んでお受け取りになった」と仰った。それはつまり、「おかげさまで、

今年も立派なすいかが出来ました。初生りでございますので、神様にお供えさせていただきます」という国枝さんの感謝の気持ち、その素直な心を喜んで受け取られたということでしょうね。

ですから、この逆を考えますと、どんな豪華なお供えをしても、心が伴ってなかったら、神様は喜ばれないということになりそうです。あの人があんなお供えをしたから自分もとか、教祖さんに良い信者だと思ってもらおうとか、そんな気持ちでお供えしても、それは雑念や邪心を供えてるようなもので、本当のお供えにはなってないんでしょうからね。

ちなみに教祖さんは、「難儀な者はお供えをしなくてもよい」とか、「貧しい者が困るから、寄付を募ったり、その割り当てをしたりはしない」とか、そんな意味のことも言っておられます。そして、その伝統は今も生きております。現在、金光教は全国各地のどこの教会でも、賽銭箱は置いてありますし、お供えという慣習もあります。お金を供える方もおられますし、それこそ国枝さんみたいに、田んぼや畑で出来た物を供える信者さんもおられます。しかし、そこに義務や強制はなくて、賽銭を入れようと入れまいと、お供えをしようとしまいと、全く自由です。

私自身の経験ですが、「しかし、全く自由だと言われてもなあ」とか思うのは、お供えをしなかったら自分が悪く思われるのではないかという、見栄や体裁の気持ちが元になってること

が多いようですね。

自分の心をチェックしてそれが分かりましたので、以来私は、賽銭もお供えも本当に自由にさせてもらい、普段は平気で手ぶらで参拝して、悩み事を聞いてもらったり、願い事を祈っていただいたりしております。

そしてまた、私は御縁を頂いてから現在までの20何年間、教会の先生からも、他の信者さんからも、ただの一度も、賽銭やお供えについて言われたことがありません。これは本当に、「見事だな」と思います。

というところで、時間がきました。来週は、「金光教と女性」について、お話をさせていただきます。ありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内Ⅲ」第４回

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」。その４回目でございます。金光教は幕末時代に備中大谷、今の岡山県浅口市金光町で始まった宗教で、金光教の教典や教祖さんの伝記には、その当時から明治に掛けての、いろんな記録が載っております。

そこで、今朝はその中から、高橋富枝（たかはしとみえ）さんという方のお話をとおして、金光教と女性について、紹介させていただきたいと思います。

高橋富枝さんは、幕末当時の備中浅口郡の人で、19歳の時に結婚しました。そして男の子が出来たんですが、その子が生まれて10日くらいで亡くなってしまったんですね。そのため富枝さんも力を落として、うつうつとして楽しまない月日を過ごし、結局は夫と別れて、実家に帰ることになりました。

その間、同じ備中大谷の教祖さんのことは、人から聞かされておりました。しかし一方、「あそこはたぬきを使うのだ」なんていううわさもあったそうです。当時のことですから、いわゆる霊験あらたかな人がいると、世間はついついそういう解釈をしたんでしょうね。

ところがこの高橋富枝さんは、教祖さんの所に参拝してその教えを聞かせてもらって、「これはそんな、たぬきだ何だという話ではない」と、深い感銘を受けました。そこで、それから

は教祖さんの教えを受けるようになり、信心を進めて、「幼き婦人ながら、千人に一人の氏子である」と、神様からも認めてもらえるようになりました。そして、教祖さんの許しを得て、自分の村で取次を始め、多くの人を助けるようにもなったんです。

しかし、さっきも申しましたように、「たぬきを使う」といううわさが広まってましたから、村の庄屋さんから、「そのたぬきをこらしめてやる」と、留籠（とめこ）という制裁を加えられました。屋外で、檻（おり）のような所に入れられたんだそうですが、昔の村では、庄屋さんにそんなことをする権限があったんですね。こんな話も私は初めて知って、非常に興味深く思いました。

それで富枝さんは、「私は犬や猫ではないから、こんな中では物は食べない」と絶食して、文字を覚えたりして勉強してたそうです。そして10日目に、同じ村のお坊さんが取りなしてくれて、ようやく解放されたんです。お坊さんが、他の宗教の者が制裁を受けてるのを、「ふん。いい気味だ」と思わず、哀れんでくれたのが偉いですね。

で、その後、改めて取次の場を設けて、高橋富枝さんは、教祖さんから大きな信頼を受ける方になられました。この富枝さんの所へ参ってた男性信者が、息子が大病した時、これはやっぱり教祖さんの所へと思って参拝したら、「あちらを何と思っておるのか。若い婦人だから軽く見て、子守のように思っておるのだろう。あちらはここの出社（でやしろ）であるぞ。神と思って尊べ」

と叱られたそうです。出社というのは、お弟子さんが新たに開いた取次の場で、系列教会ということになります。そしてこの高橋先生が開かれた教会は、明治以降も発展して、現在も続いております。

さて。そこで、最初に申しました「金光教と女性の関係」についてですが、この高橋富枝先生と同じように、信心を進めて新たに教会を開かれた女性は、他にも大勢おられます。教祖さんは当時から、神様の教えに従って人助けをするという、その立場や力に性別は関係ないと、そう考えておられたんですね。

そして、その伝統は現在も続いておりまして、金光教の先生の半分以上は、女性なんだそうです。全国各地にある教会の娘さんとか、金光教の先生と結婚した女性とか、教会長だったご主人が亡くなられたので、その奥さんが跡を継ぐためにとか。いろんな立場や年齢の女性が、男性と同じく、金光教学院という教師養成機関で学んで、先生の資格を取得されてるんです。ですから今も、教会長は女性です、という教会はあちこちにありますよ。

また教祖さんは、「女は神に近い」とも言っておられます。私の推測ですが、これは例えば、「母性本能」という言葉で表されてる、慈しみの心、大きく柔らかく包み込んで、はぐくみ育てるというその心が、神様の心に近いのかもしれないなと思います。

私、本を読むのが好きですので、金光教の各地の教会の先生がまとめられた本も、いろいろ

読ませていただいておりますが、その中の一冊に、こんなお話が出てきました。

男性の先生が修行を進めていくと、ある時期に限って、性格や気質が女性的になることがあったりするそうです。そして、その時期を越えると、物事にとらわれない、広々とした、いわゆる「清濁併せ呑む」という境地に入れるんだそうで、これを読んだ時私は、教祖さんの「女は神に近い」という言葉の一つの裏付けになる話だなあと思いました。

はい。というところで、時間がきました。最終回の来週は、侍の信者さん夫婦と、明治戊辰戦争のお話を紹介させていただきます。ありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内Ⅲ」第５回

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」。その第1回目で私は、金光教の教典や教祖さんの伝記が、自分にとって非常に面白い本、幕末時代の勉強になる本でもあると申しました。そこで最終回の今朝は、私にとってはその代表例とも言える、明治維新の時のお話を紹介させていただきます。

幕末の動乱があって、江戸城が官軍に明け渡され、元号も慶応から明治に改まりました。しかし、上野の山に彰義隊が立てこもったり、越後の長岡藩とか東北の会津藩とか、旧幕府方の抵抗が、明治2年まで続きました。

そしてその一連の戦い、明治戊辰の役（えき）には、薩摩や長州を始め、各地の藩が兵力を出しておりました。その中に、実は私は教典でこれを読んで初めて知ったんですが、岡山の藩も官軍方として出兵してたんですね。

で、岡山藩は池田家31万5千石という大きな藩で、教祖さんがおられた備中大谷の近くですから、熱心な信者になってる藩士たちもいたんだそうです。そしてその中のある侍が、この明治戊辰の役の時、出陣兵力の一人として東北へ戦（いくさ）に出ておりました。それで、その妻が心配して、教祖さんのところへ、無事を願いに参ってきてたんですね。

教祖さんが、「神様は助けてくださるから安

心していなさい」と言ってあげても、やっぱり心配で、毎日参ってくる。それである日のこと、教祖さんは、夫が助かる様子について教えてあげました。

「毎日のことで気の毒だから、神様が教えてくださってることを話して聞かせよう。まずは向こうの虜（とりこ）になる。それを神が解いてやる。出るところがない。そこで、水門を出て堤へ上がる。すると、人が見付けて鉄砲を撃つ。それが刀の鞘（さや）に当たる。それで助かって逃げてきて、船に乗って帰ってくるのである」

教えてもらった妻は非常に喜んで、安心もして、「それでは、無精をしてすみませんが、家で帰りを待ち受けます」とあいさつして帰りました。そして1カ月ほどして夫が帰ってきて、自分が助かった話をしかけましたので、妻は「私がいたしましょう」と引き取って、教祖さんから教えてもらってた話をしましたら、そのとおりだったんですね。だから夫もびっくりして、大喜びして、侍夫婦2人が連れ立って、御礼に参ってきたというお話です。

それで私、教典で初めてこれを読んだ時、「へえっ。こんなことがあったのか！」と、こっちもびっくりしました。それまで、幕末の動乱や明治戊辰の役については、いろんな本を読んできてましたけど、薩摩や長州の側からの記録とか、会津の白虎隊を題材にした小説とか、そんなのばかりでしたから、岡山の池田藩の侍夫婦の話なんて、全く想像もしてなかったことで、「これは明治維新の一つの裏話だなあ」と思っ

たんですね。

それから、このお話で私がもう一つ、「なるほどなあ」と思ったことがあります。それはこの侍の妻が、「武士の妻たる者は」とか、「夫の命は、御主君に捧げたものでございます」とか、そんな建前的な態度は取らなかったということです。まあ、同じ藩の人たちにはそう言ってたのかもしれませんが、本音本心は、「心配です。どうぞ助けてください！」であるわけで、それを教祖さんに正直に訴えてた。そこが偉いと思いました。

私は大阪市の玉水（たまみず）教会という、明治38年に開かれた教会に通わせていただいておりますが、その初代教会長が、「願いは、ありのままをありのままに」と教えておられます。「願いは、ありのままをありのままに」。その意味でもこの侍の妻は、素直な信心をしてた人だったんだなと思ったわけです。

ちなみに、侍の信者さんのお話を紹介いたしましたので、付け加えておきますと、ある時教祖さんの所へ立派な身なりの侍が参ってきておりました。それでその人が帰った後、他の信者が「今のはどなたですか」と聞いたら、教祖さんは「庭瀬の殿様じゃ」と答えられた。同じ備中の国に庭瀬藩という、２万石の小さな藩もあったんですね。

で、聞いた人が驚いて、「殿様なら、もう少し待遇の仕方があるのではないでしょうか」と言いましたら、教祖さんは、「人間には隔てがあるが、神には、殿であろうが職人であろうが、

上下(かみしも)はない」と仰ったという、これも教典に載ってるお話です。

当時、藩や幕府のことを「お上(かみ)」と言ってましたが、それについても教祖さんは、「神様があって、お上ができたのである。それであるのに、お上ができたら、神様がお上の支配を受けることになる」と言っておられる。神という存在と人間社会との、間違った逆転関係を、鋭く指摘されてたわけですね。

はい。というわけで、「かんべむさしの金光教案内」、教祖さんと当時の信者たちとのお話を、5回にわたって紹介させていただきました。機会がございましたら、またいつかお話を。ありがとうございました。

《教師インタビュー》

「何を見ても聞いてもイライラする」

（ナレ）子どもを育てるのは、楽しいことがたくさんある一方で、その時々の悩みも絶えないのではないでしょうか。広島県大竹市に住む早羽総子さんは、娘さんと息子さん、２人のお子さんを育てています。息子さんが小学校の高学年になる頃、早羽さんは思い悩むこととなりました。

（早羽）現在高校３年生になる息子のことです。以前、自分の思いどおりにならないことがあると、物に当たったり、キレやすい心の状態になりました。今でも家のソファーの両側は、蹴ったぐってボッコリ大きな穴が開いてるんですよ。それで、神様に子どもの心の助かりを一生懸命お願いするんですが、このまま育ったらどんな大人になるんだろうと、いろいろ悩んだんです。

そんな中、四代金光様の有名なお歌の一つである、「ちちははも子どもとともに生まれたり育たねばならぬ子もちちははも」を思い出したんです。

キレる息子を目の当たりにした早羽さん。そんな時、「親も、子どもと一緒に育たなければならない」という教えを思い出しました。そこで早羽さんは、親として育つために、自分の心

を点検することにしました。

まず始めたことは、自分の心の点検をしようと思って、心の中をのぞいてみたんです。そうして見えてきたのは何かというと、思いどおりにならないと、主人や子どもたちに大声をあげてキレている私の姿がありました。子どもはソファーに穴を開けましたが、私は携帯電話を投げつけて、ふすまにぽっこり大きな穴をあけている跡が今でも残ってるんです。

もう何を見ても聞いてもイライラモヤモヤするような心の状態という時があったんです。それで、本当に「こんな心の状態は嫌だ」と思ったんですよ。もうどげんか変わりたいなと。

早羽さんは、キレる息子を変えようとするのではなく、自分が変わろうと決意しました。そして具体的な取り組みを始めます。早羽さんはそのことを、「心を作る」「心の土壌作り」と表現しています。

身の回りに起きてくることを、「これで大きく豊かになりなさい」と神様が私の心を作るために用意してくださった材料と頂く。それで土壌作りをしようと、本気で決心したんです。

それは、まず1つ目に、人の悪口を言わない。怒りに任せて人を責めない。優しい言葉を使う。2つ目に、朝昼晩に神様に心を向けて、ご祈念を本当にしみじみとさせていただく。3つ目に、苦手な人を大事にする。このように具体的に取

り組んでみました。

すると、ある時こういうことがありました。子どもがごみを捨てなければいけないところに捨ててなかったんです。以前の私なら、そこで子どもを呼び付けて、怒りに任せて言わなくてもいいことまで引っ張り出して、責めていたんです。でもその時、ふと近くにあった新聞を見ると、「土壌作り」と大きく書いてありました。神様が「これで心の土壌づくりをせよ」と言ってくださっているのだと感じ、子どもを責めないでいい心の状態を頂きました。

こんなふうに、神様が応援してくださるような働きを感じながら稽古ができたのです。

早羽さんが自分を変えるための取り組みを始めると、息子さんの様子も少しずつ変わっていったそうです。

中学校の時が物に当たるピークでしたね。結局、子どもが疲れて帰ってきた時に、私がまたいらんこと言いよったんですよね。眠たいのに、「あんた勉強せんね」やらね。「なんばしよっと。あんたテレっとしてから」とか、そんなこと言いよるから、やっぱり子どもがキレるのは当たり前ですよね。今考えてみればですけどね。

息子が高校生ぐらいになってからですかね。だんだん、「あら、考えてみたら、物に当たらんごとなったね」というようになりました。ふて腐れたり、かんしゃく起こすこともなくなりました。本当にいつの間にかだったですね。だ

んだんキレることがなくなって、今では物にも当たりません。

でも、子どもが変わっていったことはありがたいことでしたけど、何より私自身が大事なことに気付かせてもらいました。もう本当にハリネズミのようなとげとげしい私でした。けど、人を責めて傷付けていたような私が、少しずつ変われたことが何よりもありがたいことだなと今思わせてもらってるんです。

私が変わると、子どもだけでなく、少しずつではありますが、主人が私を大事にしてくれる。子どもたちが私を大事にしてくれる。両親が私を大事にしてくれる。幸せが生まれる環境というのか、本当にそういうおかげを頂いてくるんですね。

もし、私の心が変わらなくて、子どもだけ変わっても、私の心はずっとイライラしたままです。モヤモヤした心の状態で一生終わらないかんやったと思うんですよ。でも、子どものことをとおして私も変わろうと思った時に、一年一年本当にありがたいなあという心が育っていってるんですよね。それがなかったら、イライラモヤモヤした心が一年一年積もってたと思うんですね。

もし、息子さんがキレなくなっても、早羽さんの心がイライラモヤモヤしていたら、幸せを感じることはできなかったのかもしれません。相手を変えようとするのではなく、自分が変わる。そこに信心のまなざしがあり、助かりが生

まれてきたのです。

《平和》

「重い記憶」

（岡本）私はね、戦前、戦中、戦後を生きた男なんです。しかし、戦争を抜きにはできない、昭和16年から20年までのことが、私の人生にとっては、一番重い時期であったように思います。

（ナレ）このように語るのは岡本眞行（おかもとまさゆき）さん、88歳です。茨城県水戸（みと）市にある金光教水戸教会の教会長として奉仕しています。

太平洋戦争が始まる前には、日中戦争で父親が出征するなど、戦争が身近なものになっていました。

小学校低学年の学芸会では、担任の先生が考えた、出征する兵士を見送る劇をしたことも、印象深いものでした。

そして昭和16年、9歳の時に太平洋戦争が始まります。高学年になると、空襲警報が鳴り、灯火管制が敷かれ、食糧不足を感じるようになります。

そして終戦の年、中学校に進学します。「重い時期であった」と言う頃のことを伺いました。

今でも覚えてるのは、入学試験というのは、いろいろとありますが、音楽の試験もあの当時あったのね。ピアノの横に立たされてね、ドレミファなんていう音階じゃないんだよ。「これは、B−29が飛んでくる音の、高度何メートルの音に近いか」という問題。今は信じられない

だろうけども。

配属将校っていうのがいてね、「教練」という授業があったんだけど、軍隊の練習ですよ。無茶苦茶なことをさせられる。例えば、雨が降ってきても、ぬれるから校舎へ入れとか、傘さしていいとかってものじゃない。隊列行進をさせられる。教官はね、大きな椎の木があって、その下に入っているから、どんなに土砂降りだってぬれることはない。生徒はみじめなもんですよ、ずぶぬれになったって走らされる。それが通った時代でした。

教室での授業はほとんど行われませんでした。時には、水戸から海岸のほうへ十数キロ離れたところへ、塹壕（ざんごう）という、敵を迎え撃つための穴掘りに駆り出されました。

そこで、戦闘機による攻撃を受けます。

壕（ごう）を掘っている作業の休憩時間だったと思いますよ。外へ出たら敵の戦闘機が、そこへ飛んできたんだ。だから見てるでしょ、みんなばぁっと。それはもう狙う「被写体」ですよねえ。そして、飛行機ってのは、ばぁーっと下がってきて、撃って、目的を果たしたら、しゃーっと上昇するでしょう。あの音だってすごいんですから。だからそれを聞いて、みんな雪崩を打つがごとく、掘った穴の中にわーっとみんな折り重なって、落ちて。私が当たったっておかしくなかったんだけども、すぐそばにいた子どもが当てられてて。その中の一人が死んじゃった。

7月17日深夜、今のひたちなか市は、戦艦からの大規模な砲撃を受けました。隣町の出来事でしたが、水戸市にも影響がありました。

日本の太平洋側の中で、一番平坦なところは、茨城県ですから。アメリカ軍は、とどめを刺すためには、鹿島灘から上陸するっていうのは、大体の常識だったみたいですね。アメリカの戦艦5隻かな。それだけのものが日本に来てっていうのは、もう、最後のとどめを刺すためにということでしょう。日立へ大変な艦砲射撃をしたんですよ。あそこにあった軍需工場は、もう全滅に近いかたち。海から飛ばされてくる玉は、どっから来るか分からないし、だからもう、たくさんの人が亡くなって。その時私は、焼ける前の教会にいてね、戸棚に逃げました。爆風で、どこから何が飛んでくるか分からない。ばーっとガラスが鳴ったり。ふすまの戸が揺れたんですから。それくらいの風圧、爆風が来るわけね。そういう恐怖心の記憶っていうのは、今でも、この年になっても思い出します。

その後、水戸も空襲を受けます。アメリカ軍は予告のビラをまきましたが、それを憲兵や警察はすぐさま回収しました。たまたまうわさを耳にした岡本さん一家は、日中は教会で奉仕する一方、夜だけは2キロほど離れた信者さんの家に避難をしていました。

8月2日、そこで、岡本さんは真っ赤に焼け

る水戸の町を見てぼうぜんとしました。その空襲で、近所の友達が防空壕で亡くなったことを知らされます。

私の友達がね、水戸の空襲の時に、蒸し焼きになっちゃったの。あれも残酷だったと思うね。防空壕に入っていたら、上は燃えるんだし、それで下手をしたら、火が入ってきますよね。入ってこない代わりにだんだんと中の空気が熱せられてくる。そしてもう、酸素もだんだん減ってくるだろう。あの中で、苦しかったんだろうなと思うとね、かわいそうだなっていう気持ちが…うん。

水戸市街のほぼ全てが焼け野原となり、住み慣れた水戸教会も焼けてしまいました。

戦争が終わり、岡本さんは幼い時から水戸教会の後継者になることを親から願われていたこともあり、その願いを受けて金光教の教師となりました。

戦争で身近な友達を2人失い、世界の平和を祈ることが日課となっています。そして、今日命があることへの感謝の祈りを捧げます。

たいして丈夫な体ではなかったにもかかわらず、そして食糧難の頃に一番成長盛りだった時を過ごしたにしてはね、88歳まで生きさせてもらうなんていうのは、本当にもう思いもしないことですよ。

戦前戦中戦後という時代を生きさせてもらっ

たっていうのが、ほんとに、今日あることを含めてなおさらのこと神様から頂く命、そういうものがあってこそという思いをひたすら強くしますね。

《教師インタビュー》

「被災地の教会から」

（ナレ）大分県日田市にある金光教大鶴教会の江田泉さんは、金光教教師として教会で奉仕しながら、災害復興支援活動にも取り組んでいます。

支援活動を始めようと思ったきっかけは、阪神淡路大震災の復興支援活動に参加したこと。被災した町の姿や、避難所に身を寄せる人の表情を目の当たりにし、「何か少しでもお役に立ちたい」という思いを強く抱くようになりました。

その後、江田さんは、そこでの経験と「お役に立ちたい」という思いから金光教の教師になりました。そして、岡山県にある金光教本部の職員をしていた平成23年、東日本大震災が起こります。

（江田）東日本大震災が起きて、現地の様子を調査するという役目を教団から頂いて、東北に行かせてもらいました。けれども、その時には支援活動をするという目的では行ってませんので、お手伝いすることがほとんどできないまま帰ってきたんです。その時に、「こういう時にこそお手伝いをしたくてこのお道に入ったのに、何もできないってどういうことなんだ」と、心が行き詰まったというか、魂が抜けたような感じになって数日過ごしていました。その時、当時教務総長だった佐藤光俊先生に、自分の思

いをお話しさせてもらったんです。そうしたら、佐藤先生が、「私は、『私がやらなければならないことは何なのか』ということを問題にしています」とおっしゃいました。その言葉が、今の私の問いとしてずっと私の中で生き続けてるんですよね。今、私としてすべきことは何なのだろうかと。宗教者として、金光教の教師として、すべきことは何なのかと。

自分のやりたいことに固執するのではなく、置かれた環境や立場の中で、自分がやらなければならないことは何なのかと常に問いかける。それが、江田さんの活動の土台となっていきました。

その数年後、江田さんは大分に帰り、家族とともに教会で生活をすることになります。そして、どこかで災害が起きると、単身で被災地に入り、そこで行われる復興支援活動に加わるようになりました。そんな中、平成29年、九州北部豪雨に遭い、今度は自身が被災者となります。

教会の上手1キロぐらい先の堤防が決壊して、その水が濁流となって流れてきました。教会も床上2メートルまで水が押し寄せてくるという被害を受けました。水が去った後は床上50センチの土砂が残って、町中に土砂と流木が至る所に流れ付いているような状況で、途方に暮れるような状況だったのですけど、そういう中で、自分はどうさせていただくかと考えました。教会を修復したその後に地域のことをさせてい

ただこうかとも思ったんですが、地域全体が被災している中で、「お役に立たせていただきたい」という思いがやはりありまして、「徹底的に地域のお役に立ちたい。立たせていただこう」と思ったのです。

教会が被災してから3カ月ぐらい経った頃に、地域の方が、「教会のことはしなくて大丈夫なの？」というようなことを言うてくださることがだんだん増えてきました。けれども、そういう中で答えさせてもらっていたのが、「『自分のことは置いといて、人のことを先にさせてもらったら、自分のことは神様がいいようにしてくださる』という教えが金光教の中にはありますので、私は今、それを実験実証しています」ということを地域の方に言っていました。「あんた、それを真面目に信じとんかい」「はい、信じてやってみてますんで、結果を見とってください」というような会話をすることが増えてきました。

そこから数カ月経って、地域のこともだんだん落ち着いてきて、教会の復旧復興ができてきたようなことでした。

地域の復旧作業に当たる中で、江田さんが言い続けてきたことがあります。それは、「絶対大丈夫だから」という言葉。地域を見渡した時に、一番被害が大きかったのは教会でした。にもかかわらず、教会を後回しにして、地域の復旧作業に取り組んだ江田さん。そんな姿を見ていたからか、「あなたが大丈夫って言うんだっ

たら、うちも大丈夫」と、元気を出して帰られる方もいたそうです。

「一番被害の大きかった教会から『大丈夫』を発信することで、いい働きができたのかな」。江田さんは当時をそう振り返ります。

たとえ自らが被災したとしても、いつもと同じように、「今やらなければならないことは何か」と考え、行動していく。それは、江田さんの中で揺るぎないものとなっています。そして、その根底にあるものは、「神様への祈り」だと江田さんは言います。

私が被災地に行けばお役に立てるということは約束されているわけでも何でもなくて、実は、初めて行くような被災地では、どういったお役に立てるんだろうというようなことは分からないまま行かせてもらっています。けれども、祈りながら行かせてもらっているというのが、実は本当のところかもしれないですね。その中で一つひとつこれまで使っていただいたのかなと、最近強く思うようになってきましたね。そこを信じて動けばお役に立てるんじゃないのかなって。祈りながら活動させてもらうということをさせてもらっています。

何も分からないままでも、祈りながら行動すれば、神様が導いてくださる。そう信じることが、江田さんの活動を支える大きな力になっています。

《私からのメッセージ》

「スナックの祈願祭」

東京都・麻布教会　松本信吉

おはようございます。金光教麻布教会の松本信吉54歳です。

教会の近所に小さいスナックがありまして、カラオケを歌いながら、わいわいと楽しむお店なんですが、値段はリーズナブルだし、ママさんも気さくな人柄なので、地元の人たちが気軽にやってきます。で、私もそのうちの一人なんです。

ママさんは信者さんではないんですが、そうしたご縁から、昨年の1月、店の商売繁盛をお願いするお祭りをしてほしいと依頼されました。常連のお客さんたち20人も一緒にお参りに来られまして、神様に、今までのことをお礼申し上げ、お店のますますの繁盛を祈願させてもらいました。

ところがこの後、新型コロナウイルスの感染拡大で緊急事態宣言、お店は休業せざるを得なくなった。その後は、感染防止に細心の注意を払って営業してこられたんですが、年末になって、なんと店主のママさんがコロナに感染してしまったんです。

ママさんは、すぐにフェイスブックに書きました。

「私は昨日発熱があり、本日病院で調べたところ、陽性反応が出ました。皆様には大変ご迷惑をお掛けして申し訳ありません。保健所から

の指示を待って、濃厚接触者に該当するお客様には個人的に連絡させていただきます」

お客さんたちに、ありのままを正直に報告されたんですね。そして翌日、保健所から連絡を受けた直後には、「不安になられている方もいらっしゃると思うので、保健所から聞いた内容をご報告させていただきます。当店はカウンターにビニールシートがあり、マスクを着用しての接客のため、お客様は濃厚接触者には該当しないとのことでした」と、こう伝えたんだそうです。

従業員や関係業者など、濃厚接触の可能性がある方にはすぐに検査してもらいましたが、結果はみんな陰性でした。ママさん自身は発熱や味覚障害、せきや頭痛などの症状がありましたが、幸いにも10日間の自宅療養で全快しました。ママさんは、「自分の体調もさることながら、お客様にご迷惑が掛からないようにと心配で、ただ祈るしかありませんでした」と仰っていました。

感染のうわさが立って、たちまち廃業に追い込まれたお店もたくさんある中で、自分が感染したことを包み隠さず伝えて、お客さんが不安にならないように気を配った。これは大変勇気がいることだったと思いますねえ。どうしてそういうことができたんでしょうか。お正月には祈願祭を仕えて、神様にお願いしたじゃないか。お客さんも一緒にお願いしてくださった。神様はきっとお守りくださる。皆さんもきっと分かってくださる。そんな思いが、ママさんの背中

を押したのかも知れません。

こういう実直な姿勢が、神様のお心にかなったんでしょう。結果、お客さんの信用を損なうことなく、むしろお互いの信頼関係が一層深まって、この難局を乗り切っていけたんです。お客さんは少しずつ戻ってきました。営業利益は例年よりずっと少なくなりましたが、給付金や家賃の減免などもあって、何とかお店を続けられています。

神様にお願いしたのに散々な年だったと、そんなふうに思ってもおかしくないでしょう。でもママさんは、神様のおかげで立ち行くことができたと思われたようで、「松本さん、また祈願祭をしてください」と申し出られましてね、２０２１年１月、今年も祈願祭をお仕えしました。

さて、金光教が広まっていった明治の初期も、世界中にコレラの大流行があったんですね。国内でも、多くの人々が苦しんでいた。そんな中、大阪の地で信心を伝え、たくさんの人を救い助けたのが、後に大阪教会を開いた白神新一郎先生という方でありました。

もともと白神先生は、岡山で米問屋を営んでいたんですが、病気で目が見えなくなってしまいました。今一度、日の光を見たいと願って、様々な神仏にすがるんですが、なかなか良くならない。で、最後にたどり着いたのが、金光教の教祖のところだったんですね。何日も参拝を重ね、教祖からお話を諄々と聴かせてもらううちに、白神先生は、天地に満ちわたる神様の

お働きを悟っていきました。そうして心の眼が開いていく過程で、ついに肉体の眼も開いていった。実際に目が見えるようになったんですね。この感激を、世の多くの人々にもお伝えしたい。白神先生は、居ても立ってもいられなくなって、コレラで多くの人々が苦しんでいる大阪に上ったわけです。

白神先生は、難儀を抱えている人々に「安心の道」を説いていきました。目の前の不安で心を苦しめるのはやめよう。神様はどんな時も私たちを慈しみ、恵みを授けてくださっている。そのことを深く悟るところから、立ち行く道が開かれるのだと教えたんです。

あれから百数十年を経て、世界中がコロナ禍に苦しんでいます。私は今、「難儀をしている世の多くの人々に、どうか安心の道を授けてやってくれ」と神様から頼まれているような気がしてなりません。

先ほどのお店のように、大変な中でも、神様のお働きを感じて、力強く生きている人たちがいます。

私たちは、共に苦しみ、共に悩んでいますが、そんな時こそ、神様に心を向け、力を合わせて安心の道を歩もうではありませんか。

今日もあなたにとって素晴らしい日になりますように。Have a nice day！

《あなたへの手紙》第1回

「理不尽な上司／環境問題」

おはようございます。私は福岡県北九州市にあります、金光教北九州八幡教会の野中正幸と申します。

最初に、30代男性からのご相談です。

「会社に就職し、早5年。最近、直属の上司が替わり、折り合いが悪く、何かと摩擦があります。自分にばかりしんどい仕事を回し、失敗するとみんなの前で叱責されます。どう付き合っていけば良いか分かりません。なるべく距離を置きたいのですが、直属の上司なので難しいです。どうしたら気持ちよく働けるでしょうか」

このような内容です。

自分にばかりしんどい仕事を回され、皆の前で叱責される状況というのは、詳しくお聞きしないと分かりませんが、あなたの成長のための叱咤激励というレベルを超えているように思います。辛抱や我慢をしすぎていないでしょうか。とても心配です。

私の知り合いの金光教の信奉者の方も、上司が理不尽に怒ることに悩んでいました。この方は、どうしようもなくなって、教会で先生に相談しました。

先生は、「上司からされたこと、言われたこと、全てを、自分でため込まずに教会で私に話してください。神様へ向かって全て吐き出す気持ちで話してください。私もあなたのことをいつも願っています」とアドバイスしてくださり、

それを実行しました。

全てを話し、お願いしていくことで、心を落ち着けて仕事ができるようになってきました。いつの間にか、上司のことも「どうか、心を落ち着けて仕事ができますように」とお願いするようになってきました。

それを続けるうちに、その上司が、自分自身の悩みや思いをその方に打ち明けてくるようになったんです。上司は仕事のプレッシャー、不安が原因で理不尽な怒りとなってしまっていたようです。

今度は、上司の話をしっかりと聞き、教会でそのことをお願いするようになりました。その後、上司からは行き過ぎた行動への謝罪もあったそうです。

教会で全てを話し、お願いしていくことで、心の落ち着きを得て、どうすべきかが少しずつ見えてくるのではないかと思います。「これはパワハラなので、しかるべきところに相談すべき」となるかもしれない。先の方のように、上司自身、心の弱さを自覚していくことになるかもしれない。

自分の中だけで悩んでも行き詰まってしまいます。さらに人間関係の問題は簡単なものではなく、複雑で、解決方法も一様ではありません。

自分の中にため込み、全て抱え込まず、話していくことをされてはどうでしょうか。金光教の教会で、先生があなたのお話をしっかりと聴いてくれます。もし気が向くようでしたらお近くの教会を訪ねてみてください。どうかあなた

と上司、また会社全体が良いほうへ行くことを願っています。

続いて、70代女性の方のご相談です。

「地球環境汚染が悪化しているといわれます。私には孫がいますが、未来の世代が安心して生きていける地球を受け渡していくのは、今を生きる私たちの大切な役目だと思います。そう思いつつも、つい便利で快適な生活にいや応なく流されています。また、私一人が取り組んでも、世の中は何も変わらないのではと思い、気持ちと行いがかみ合いません。環境問題にどう取り組めばいいのでしょうか」

このような内容です。

現代の私たちの生活は、どうしても知らず知らず、天地自然を汚してしまっている生活です。ではどうしたらよいのでしょうか。

金光教では、この天地全体が神様、ご神体とされ、天地の恵みを頂いて、生かされていることにお礼を申し上げる心を大切にしています。

私が子どもの頃の記憶ですが、私の祖父は、お風呂に入る前に湯船に向かい、柏手（かしわで）を打っていました。父もまた同じようにしていました。

「人間の力だけで、水もお湯も出来ない。天地の恵みを頂いて今日もお風呂に入り、一日の疲れを取ることができる」。そのように、柏手を打ってお礼をしていたのです。

このような思いは受け継がれ、私も子どもたちとお風呂に入る際、柏手を打ち、お礼をする

ことを大事にしています。

地球環境の危機について、考えたり教えたりすることはもちろん大切ですが、その前に、この天地の恵みを「使わせていただいている」「ああ、ありがたい」という思いを子どもさんらと一緒に実感することが大事だと思います。

しかし今の時代、物も食べ物も豊富にあり、なかなか実感するのは難しいかもしれません。私は子どもたちと、「きれいなお水がなかったらどうなる」「空気が汚くなったらどうなる」など、どういうことになると困るのか話をします。今、当たり前のように思っていること、行っていることが、実はありがたいことなのだと気付くきっかけになるかもしれません。

そうやって、天地の恵みのありがたさが実感できれば、「しないといけないから」ではなく、自ずと大切に使う心になっていくのではないでしょうか。決して一人取り組んでも意味がないわけではありません。一人のそういう思いが家族みんなに広がり、後世へも伝わっていき、天地自然を大切にする生活を、みんなで送れるように願っています。

《あなたへの手紙》第2回

「近隣トラブル／息子にイライラ」

おはようございます。大阪府・金光教鳳教会の工藤由岐子と申します。

今日の最初のお悩みは、32歳の専業主婦、さおりさんという方からです。

「私は住宅街に住んでいますが、お隣の人との折り合いが悪く悩んでいます。例えば、うちの庭の木の葉っぱが、隣の家の前に落ちると、クレームを付けられます。また、子どもの声がうるさいとか、とにかく何かと文句を言ってくるのです。だけど、お隣だから、ケンカはしたくありません。どう向きあえば良いのか、何かアドバイスがあれば教えてください」

このようなお悩みです。

そうですか。お隣からいろいろと文句を言われて、さおりさんは、ずっと辛抱なさっているんですね。普通なら、売り言葉に買い言葉となりがちですが、ケンカはしたくないというお気持ちでいらっしゃって、お優しい方だと思いました。

お話の中に、落ち葉のことがありましたね。実は私の家も、さおりさんのところと同じで、庭の木の葉っぱが、隣の家の前に落ちることがあります。気付いたら掃除はしていますが、もしお隣に我慢させているとしたら申し訳なく思いますので、私は時々お隣に、野菜や果物をおすそ分けしています。そうするとお隣さんは笑

顔になり、私自身も良い気持ちになるのです。コミュニケーションが取れていますと、人間関係は円滑にいくように思います。

さおりさんの場合は、やりにくい面もあるかもしれませんが、お隣さんの様子を見ながら、さおりさんができる範囲のコミュニケーションを取ってみてください。その際、「こんにちは」というあいさつも大事だと思います。これは、するのとしないのとでは大違いで、返事がなかったとしても、声をかけ続けていると、何か変わってくることもあるかと思います。

さおりさんが思い付くことをやってみましょう。あなたなら、きっとできます。私も陰ながら応援していますね。どうか、お隣の人と都合良くコミュニケーションが取れて、お互いに心が落ち着き、気持ちの良い生活ができますようにと、お祈りしています。

次に紹介しますのは、41歳の主婦、ひとみさんという方からのお悩みです。

「私には、中学2年生の息子がいますが、宿題や提出物を煩わしく思い、いつも後回しにするのです。間際になって困っている様子で、毎回毎回、『なんで早くからしておかないの！』という親子げんかになり、親も子も疲れます」

このようなお悩みです。

ひとみさんは、お子さんのことを心配なさっているんですね。お母さんですもんね、お気持ちよく分かります。

実は、私自身が昔、間際にならないとできないタイプだったんです。嫌なことからつい逃げてしまって、どこかで、何とかなると思っていたのかもしれません。両親はそんな私に、ハラハラしていたと思います。

結局のところ、本人は本当の意味で困っていないんです。大人になって社会に出ますと、ギリギリに物事を進めていましたら、職場や人に迷惑を掛ける場面も出てきます。まあ、学生の間は人に迷惑をかけるというより、自分が損をするだけのことが多いですからね。

私の経験からいいますと、このギリギリの癖は、簡単には直りませんでした。でも、心配しないでくださいね。時期が来ましたら、必ず直りますから。直るというより、変わるんです。私も昔と変わりました。間際ではいけないというのを、ちゃんと分かる時が来ます。大丈夫です。

ただ、今はお子さんは思春期に入っていますので、接し方を変えましょう。頭ごなしに息子さんを叱らず、頑張ろうねと応援してあげるようなスタンスが良いかと思います。息子さんはきっと、自分でも、間際にするのが良くないというのを、頭では分かっているはずです。それでもできないので、もどかしく思っているんじゃないでしょうか。その上に、周りからやかましく言われますと、ストレスがたまります。また、ひとみさん自身も、叱ったら余計にイライラしませんか。言ってプラスになることがあればいいですが、かえって親も子も疲れるだけで

すよね。でも、そばで見ていると、つい口を出したくなるのも分かります。それも親の愛情だと思いますが、そこはできるだけ我慢しましょう。

子育てというのは、なかなか辛抱がいることです。私も子育ての経験をしていましたので、お気持ちがよく分かります。どうでしょう。もしよろしければ、教会にお参りしてみませんか。お話を聴かせていただきますよ。そこでしゃべって発散して、イライラを置いていったら、気持ちが落ち着くかもしれません。そうなればきっと、息子さんに対しても冷静になれます。お母さんの気持ちに余裕ができますと、子どもさんにも良い影響を及ぼすと思います。息子さんのこれからの成長を楽しみにされて、どうぞ、見守りながら子育てをしてくださいね。私も応援しています。

《あなたへの手紙》第3回
「娘が受験で不合格／お葬式は必要か」

おはようございます。大阪府・金光教金岡教会の岩本威知朗です。

最初に、43歳の女性からのご相談です。

「娘が高校受験で第1志望校が不合格になり、とても落ち込んでいます。親としても、娘が一生懸命勉強してきた姿を見ているだけに残念で、どう言葉をかけていいか分かりません。また、受験前に神様にお願いしたのに落ちてしまい、『神様なんていないのでは』とさえ思ってしまいます。どうしたらいいでしょうか」

このようなご相談です。

まずは高校受験、お疲れ様でした。娘さんもお母さんも、不安や心配を抱えて、よくこの時期を通られましたね。お互いによく頑張りました。それだけに、第1志望校に落ちてしまったことは、さぞかし残念に思われたでしょう。

実は、私の娘も昨年高校受験だったんですが、あなたの娘さんと同じように、第1志望校は不合格でした。その時は親子共にショックで、泣いている娘にかける言葉が見付かりませんでした。ですから、娘さんやお母さんの残念なお気持ち、よく分かります。

私の娘は、結局第2志望の高校に入学しました。そして、登校が始まり学校生活にも慣れた頃、改めて、今の学校に通うようになったことを、親子で振り返ったんです。

同じように娘も、神様に合格祈願をしていま

した。それは「合格しますように」というお願いではなく、「自分に合った高校に行けますように」と願っていたんです。娘はそのことを思い出して、「今通っている高校は、神様が選んでくれたんだ」と思えたようで、前向きに考えられるようになりました。

第1志望の学校は、自由な校風だったんですが、今通っているところは、大変勉強に熱心で厳しい学校でした。娘は、「もし第1志望校に行ってたら、自分は意志が弱いから、楽なほうに流されて、勉強を頑張れなかったかも。大学進学も諦めていたかも」と言います。「勉強をしっかり頑張りなさい、って神様が導いてくれた」と感じているようです。さらに、後から分かったことですが、今の高校は偶然にも曽祖父の母校でもあって、ご縁を感じました。親子共に、今はこの学校で良かったと思っています。

娘さんも、神様にお願いして一生懸命努力してきた結果ですから、きっとこれから通う高校が、娘さんにとって一番ふさわしい学校になると思いますよ。「神様なんていないのでは」と思われているかもしれませんが、神様は、こちらの願い以上のことまで導いてくださいます。まずは現状を受け入れて、その中から楽しみや喜びを探してみてはどうでしょうか。きっと、娘さんにとって、新しい発見や出会いがあると思います。

どうか娘さんが、希望を持って、元気に成長されますことを、お祈りしています。

次は、74歳の女性からお葬式についてのお尋ねです。

「夫の親せきが亡くなり、私たちの知らないうちに、お葬式をせず直接火葬する、いわゆる『直葬』で納骨されました。『直葬』は、今の時代よくあるよ」と知人から言われましたが、月日が経ち、本当にそれで良かったのか、亡くなった方は納得しているのか心配になってきました。お葬式はやはり必要なのでしょうか」

このようなお尋ねです。

私もこれまで、周りで「直葬」されたという人の話を聞いたことがなかったので、「今の時代よくある」と聞いて驚きました。さぞかし戸惑いを感じられたことだと思います。最近では「家族葬」など、簡略化する傾向がありますよね。でも、まず大切なのは、「お葬式は、誰のために、何のためにするのか」ということだと思います。

いろいろな考え方があるとは思いますが、金光教では、お葬式ではまず神様に、亡くなられた方が生前中、命を頂き、生かされてきたことのお礼を申し上げて、その方の亡くなった後の安らぎと、ご遺族の立ち行きを願うことを大切にします。さらに、亡きご本人始め家族が、これまでお世話になった方々への感謝の気持ちを現す場でもあると考えます。

私の大叔母は、米寿を迎えた時、「私が亡くなったら盛大なお葬式はしません。元気なうちに感謝を申したい」との思いで、これまでお世

話になった方々を招待し、「御礼の会」をしました。その時、自分の「人生回顧録」を作って神様にお供えして、それをみんなへ配って感謝の気持ちを伝えました。その後20年、107歳まで長生きをし、亡くなった時は「家族葬」で神様に人生のお礼と今後の立ち行きを願いました。

人は死んでしまうと肉体は無くなりますが、魂である御霊（みたま）は、ご遺族やご親族の心の中に生き続けると言われています。御霊様にとって、みんなから忘れられることが、何よりも寂しく悲しいことです。あなたが今、亡くなられた方をしのび寂しく思い、忘れずにいることが、御霊様の喜びになると思います。もしかしたら他のご遺族にも、「本当に『直葬』で良かったのか」と思われている方がいるかもしれません。一度みんなに相談してみてはどうでしょうか。

お葬式については、生前中に家族で話し合っておくことは大切なことです。金光教の教会では、お葬式や御霊様のことなど、丁寧に教えてもらえます。いろいろと分からないことがあるでしょう。よろしければ、どうぞお近くの教会へお尋ねください。

《あなたへの手紙》第４回
「42歳の引きこもりの息子／ダウン症の赤ちゃんを妊娠」

おはようございます。私は愛知県にあります金光教額田教会の河邉芳美と申します。

最初は、42歳の息子さんを持つお母さんのお悩みです。

「私には、42歳の独身の息子がおり、将来のことを思うと心配で、息子に言っても、『一人のほうが楽だから結婚したくない』と言います。その上、仕事を辞めてしまい、引きこもりになりました。いろいろと言いたくなりますが我慢をしています。私はどう気持ちの折り合いをつけたら良いのでしょうか」

このような内容です。

私にも息子がいますので、お母さんのお気持ちがよく分かります。子どものことを思うといろいろと言いたくなりますが、我慢されているから素晴らしいですね。昨今いろいろな生き方がありますが、親としては、早く結婚してほしいと思うのは、ごく自然なことだと思います。しかし、よくよく考えてみると、子どもがいるからこその悩みかもしれません。神様からお恵みいただいて子どもを持たせていただけたこと、そして息子さんがこれまで42年間、生かされてきたことをお礼申すことが大事だと思います。お母さんがあれこれ悩んでも苦しいだけでつらいですよね。それならば、一度神様におす

がりして、お願いしてみてはどうでしょうか。

私の知り合いで、女の子2人のお子さんを持つお母さんがおられるんですが、上の女の子が、ある時期から万引きや、いろんな悪いことをするようになりました。その度に親が呼び出されるということが何度もあったそうです。そのことを教会の先生に相談し、一心に神様におすがりしていきました。すると、ある日、その女の子が、「私は一体今まで何をしていたのだろう」という思いがふと心に湧き起こり、その後改心したそうです。神様へ一心にお祈りしたことで、お母さんの思いがお子さんに伝わったのだと思います。

息子さんが、会社を辞めて引きこもりがちなのも、会社で何かあったのかもしれませんね。勤めていた会社を辞めたのですから、余程のことがあったのだと思います。今は引きこもりに見えますが、息子さんの心を整える、次のための充電期間かもしれません。今まで働かせていただけたことを感謝して、見守ってあげてください。喜ぶ心に神様は道を付けてくださいます。よかったらお近くの教会を訪ねてみませんか。そして、息子さんのことを陰ながらそっと祈ってあげてください。きっと息子さんにとって良いように神様がしてくださいます。

次に、お子さんの出産に不安を感じている妊婦さんからの相談です。

「私は36歳の妊婦です。羊水検査の結果、ダウン症と診断されました。産みたい気持ちはあり

ますが、育てる自信がありません。せっかく授かった命を粗末にしていいものかと悩んでいます」

このような内容です。

いろいろと思うところがあると思いますが、まずは妊娠おめでとうございます。初めてのお子さんでしょうか。初めてのお子さんでしたら、ただでさえお産が未知の世界で心配な上に、さらに不安でいっぱいだと思います。

実は、私の子どもも16年前、羊水検査でダウン症だと分かり、産むか産まないかの決断を求められたので、あなたの気持ちはよく分かります。私が妊娠4カ月の時に、「胎児の首が太いので羊水検査を」と言われ、大変ショックを受けました。そして、何とかうちに帰り玄関に入ると、金光教の教えが書かれた日めくりカレンダーが目に入りました。そこには、「子を産むはわが力で産むとは思うな。みな親神のめぐむところぞ」と書かれていました。特に「みな親神のめぐむところぞ」の言葉が目に飛び込んできました。みな親神のめぐむところ、みな神様から命を頂いた子どもなんだと改めて思い直し、動転した心を取り戻しました。そして、神様から頂いた命ということ、堕ろしてはかわいそう、この子もこの世に産まれてきたほうが幸せだろうという思いと、この子をとおして私の心も神様にお育てを頂きたい、また家族の絆が深まることも願って産む決心をし、出産をしました。

私たち人間は、神様から体を頂き、神様の心を頂いて生まれてきます。そして、神様から食物を頂いて、生かされているのです。みんな神様から命を授かっているのです。神様からお恵みを頂かなければ、子どもは授かりません。中には、いろいろな理由でやむなく諦める方もおられますが、あなたは産みたい気持ちがあり、せっかく授かった命を粗末にしていいものかという戸惑いには、かわいそうという気持ちがあると思います。そのかわいそうという心が、神様の心です。そのような心を持つあなたは、きっと素敵なお母さんになれますよ。大丈夫です。神様におすがりしながらお子さんのお世話をされてはどうですか。

ダウン症は、発達がゆっくりですが、穏やかでほほ笑んでいるように見えることから、「エンジェル」とも言われているんですよ。うちの子は天真らんまんで人懐っこく、誰とでも友達になり、ダンスが大好きで、音楽が流れると突如踊り出して、その場が和んで笑いが絶えませんでした。そして、この子のおかげで、健常児の長男の時には見えなかった世界を神様から見せていただいたようで、視野が広がりました。

産まれてくるお子さんと共に、焦らずゆっくりお育てを頂きませんか。

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送　日曜日　あさ5時40分

放送センターHP
「こころで聴く
おはなし」

「こころで
聴くおはなし
Podcast」

放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。